

実践的推論と動物：アリストテレス研究の一端から

文景楠 (MOON Kyungnam)

東京大学

実践的推論の自然化を論じる際に第一の（そして最大の）関門となるのは、恐らく「実践的推論」及び「自然」とは一体何かという問いに答えることである。これら二つは、どちらも複雑で長い歴史を経て形成されてきた哲学的概念であり、その内実に関する合意は存在しないとあってよいだろう。それでも一つだけ確実であると思われるのは、「実践的推論」に関していえば、古代の哲学者アリストテレスの残した思索がその意味を考えるための参照軸として未だに有効に働いているという点である。アリストテレスが発明した哲学的語彙の多く——例えば、「プシューケー」や「形相・質料」といった形而上学的な道具立て——が、時代の変遷とともに原型をとどめないほど激しく変容したかもしくは死滅したのに対して、「実践的推論」は現代哲学において中心的な主題でありながらもアリストテレスの直接的な影響力を未だに認めることができる一つの例となっている。

本提題で私が目指すのは、動物における実践的推論の位置付けをめぐって現在のアリストテレス研究の一端にてなされている議論を参照することから、（とりあえず経験科学で処理できるようにするといった程度の意味で理解された）「自然化」を実践的推論に適用する際に考慮しなければならない課題はどのようなものかを考察することである。提題においては、まず「アリストテレスの実践的推論」に関して抑えておくべきと思われる事柄を幾つか確認し、続いて、特に動物と人間に共通するものとしてアリストテレスの実践的推論を解釈した近年の試みである Fernandez 2014 を紹介する。

私は、Fernandez の解釈したアリストテレスが、無理の少ない仕方で実践的推論を動物に位置付けた上で、人間の実践的推論と共通する地盤をもつものとしてそれを理解するための有力な示唆を与えていると考える。こういった提案は、一見する限りでは実践的推論を自然化するというプロジェクトに親和的な方向性を指し示しているように思われる。しかし私は、動物との距離を縮めるという問題設定から出発して導き出された実践的推論理解が、そもそも実践的推論という言葉で（現代の）我々が考える事柄を本当に捉えているのか、また、推論全体を自然化するという最終的な目標を追求する際に重大な欠落を生じさせることはないのか、といった点がさらに問われなければならないと考える。本提題においては、こういった点を中心的に考察することで、実践的推論、さらには推論全体を自然化するというプロジェクトが向き合わなければならない課題を正確に見定めることを目指す。

主要参考文献

Fernandez, Patricio A. 2014. Reasoning and the unity of Aristotle's account of animal motion. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 47: 151-203.